

「日本近代文学概説」の授業評価

国語専修・国際理解コース、青木亮人

1. 授業の基本情報

日本近代文学概説は、学校教育実践コース国語教育専修・総合人間形成課程国際理解教育コース日本アジア理解分野の他に、小学校及び中学・高等学校国語教員免許取得を目指す他専修学生が受講する選択科目である。主に二年次対象の前期開講科目である点、また複数の専修からの受講生という点を考慮すると、受講生は近代文学に関する予備知識をほぼ持たないと仮定し、内容は近代文学史の入門編という位置付けでまとめた。

授業展開としては時代順に作家や作品を紹介し、また各回ごとにテーマを設けた。具体的な展開及び発表者の対象作品は下記の通りである。

01：ガイダンス

02：学校教育以外の「文学」について

03：知識がなくとも気付かなければいけない「文学」の読解について

04：島崎藤村の詩を通じて「作品論」を考える1

05：島崎藤村の詩を通じて「作品論」を考える2

06：島崎藤村の詩を通じて「作品論」を考える3

07：夏目漱石「坊っちゃん」を通じて近代文学の本質を考える

08：芥川龍之介「秋」を通じて近代文学の特徴を考える

09：太宰治「女生徒」を通じて「日常」を考える

10：短歌や俳句が「日常」や「平凡」をいかに表現したかを考える

11：倫理の向こう側―川端康成の「文学」について

12：「文学」と「国語」の違いは何か

13：新美南吉「ごん狐」を通じて作品の「急所」を突く1

14：新美南吉「ごん狐」を通じて作品の「急所」を突く2

15：まとめ

一回目のガイダンスで受講生にコメントを求めたところ、「近代文学史」に対する知識やイメージとしては、

①教科書や受験等で学ぶ以外に、過去の文学作品に親しむことはほぼない

②自分たちと縁遠い過去の話、あくまで「勉強」

③「歴史に残る文学者＝人類の模範となるべき偉人」というイメージが強い

これらのコメントが多かったため、二回目以降の具体的な授業展開を下記のように行った。

- ・①を踏まえ、近代文学には多様な作家や作品が存在し、私たちの考える「文学」がごく一部であることに意識的になるため、教科書等ではほぼ触れられない作家情報や作品等を中心に紹介することにした
- ・②に対応するため、多様な映像や画像、また落語等の他ジャンルも参照しつつ、過去の文学に触れることが身近な問題や共感につながりうることを目標とした
- ・③を踏まえ、偉大な文学者が道徳的で人道的であるとは限らず、むしろ反道徳的であることが多いことを意識するため、川端康成等の作家も紹介することにした

二回目以降はこれらを軸に内容を構成し、各回ごとのテーマに従って授業を行った。

なお、成績評価は各回の発表・質疑応答・出席等により総合的に判断することとした。

2. 授業評価・授業研究の内容

シラバスに記載したのは下記の通りである。

【授業目的】

日本近代文学のルーツや特徴を知ること、現在の国語教育で「文学」と見なされているものがどのような特徴を持っているかを学ぶ。

【到達目標】

①日本近代文学の流れや特徴、その目指す方向性を把握することで、「文学＝国語」の理解を深めることができる。

②日本近代文学史について具体的なイメージを持ち、説明することができる。

上記の目的・目標を、先に述べた「授業概要」での授業展開の中で実感してもらうことを目指した。

■授業評価法について

最終回到学生アンケートを行った。項目は下記の通りである。

1. 最も印象に残ったこと
2. 取り上げてほしかったこと
3. その他、全体の感想・コメントなど

■授業評価結果について

各項目を概略すると下記の通りである。

1 について

- ・教科書に掲載された文学者や作品を基本に、近代文学についてそれなりに知っていると思っていたが、泉鏡花等の知らない文学者が多く存在したことに驚いた。
- ・「坊っちゃん」や「走れメロス」など、これまで教わってきたり、感じたりした解釈と全く異なるテーマが実は作品にあったことを知って驚いた。
- ・太宰治など読んだことのある作家が、他にも面白い作品を書いていたことを授業テキストを通じて知ることができた
- ・文学者には虐げられた生活や自殺、苦悩、反倫理的な生活など、暗い生涯を送る作家が多いことが印象的だった。
- ・文学作品は特別なものや大きな出来事、人間の真実といった深い内容を書くべきとどこかで信じこんでいたが、そうではなく、ささいな日常や平凡な毎日の何気ないひとときといった、忘れがちな取るに足らないことこそ大事で、大切なものと描く文学作品も多く存在していたことに驚き、「文学」の幅広さを実感した。
- ・学校教育で教えることは「道徳」なのか、「文学」なのか、線引きは難しいが、国語教育の多くは無意識的に「道徳」的な読解が多いかもしれない、ということに気付いた。

2 について

- ・各回ごとのテキストの内容や分析、評価等をもう少し取り上げて言及してほしかった
- ・現代作家もより多く取り上げてほしかった

3 について

- ・授業内容に変化を付ける点では良かった
- ・文学史を身近に感じた
- ・意外な組み合わせから浮かび上がる共通点が面白かった
- ・映像を観た、グループワーク等は関心を持つ学生が多かったと思うが、教師が専門的な内容を説明する時間の長い時などには眠そうにしている学生が多かったと思うので、工夫した方がよいように感じた
- ・扱う対象が幅広く、面白かったが、学校教育現

場で役に立つかどうかは疑問

- ・映像や画像と文学の組み合わせの試みは良いと思うが、作家の暗い人生を知って少し憂鬱になったり、また専門的な話は眠くなることもあった
- ・文学が映画や写真など他ジャンルとも深い関係にあることを知ったり、また昔の作品を現代のサブカルチャー等とつなげることで、過去の作品を身近なものとして感じる発想を知ることができた

3. 授業時間外学習の促進・総括

各回ごとに扱う文学作品を事前に通読することを受講条件として示したため、授業時間外学習はある程度促すことができたように感じる。短い作品もあるが、夏目漱石「坊っちゃん」等はそれなりに時間を要する長さの小説であり、その点、授業外に文学作品に費やす学習時間は確保できたものと判断している。

実際に読了したかどうかは受講生に委ねる形をとり、それについては毎回の授業最後にコメントシートを記入することを求めた。作品を読んだか否かはそのコメントの内容でおおよそそうかがえるが、正確に判断するのは難しいため、次回の課題作品を必ず読了するように求める授業設計は改善の余地があると感じられた。

毎回のコメントやアンケート結果等を参考にすると、「授業の概要」で触れた①～③を踏まえての授業展開はほぼ目標を達成できたと感じられる。ただ、反省点も少なくない。ここでは一点上げる。

近代文学の幅の広さや、自身の抱く「文学」概念が意外に偏ったもので、狭かったことに自覚的になりうる契機を与えることができたのは授業の成果ではあるが、文学作品解釈に関する理論や認識的布置に関する詳細な内容を伝えようとすると、学生の学習意欲が著しく低下し、十分な理解を得るのが難しかった。受講生の多くは一～三回生であり、現行カリキュラムでは文学作品読解の方法論や発想法等をほぼ知らない状態で受講することが多いため、授業内に専門的な分析や読解を示すのは良いとして、その前に十分な説明が必要であった点である。受講生にしてみれば、なぜそのような発想や説明が成り立つのか、必要なのかの前提がないため、教員の説明を唐突に感じるが多かった節がある。彼らはあくまで「国語」教員を志望する受講生であり、「文学研究」についてほぼ知らない状態で受講していることに留意した上で、より分かりやすい授業展開ができるよう心がけていきたい。